

## 6. 人間観

### 6-1. 人間の分類

#### 6-1-1. 性と年齢による分類

ティネシ teynesi (生後まもないような赤ん坊)。マッカチ matkaci (女の子)。ヘカチ hekaci (男の子)。

[北野ハル氏]

生後間もない1才過ぎる頃までの赤ん坊をティネシ teynesi という。2才位の男の子はヘカチ hekaci、女の子ならマッカチ matkaci という。イランマカカアン ポン マッカチ iranmakaka an pon matkaci (きれいな女の子) とか言う。10何才にもなったような女の子にもマッカチ matkaci と言える。

[北野ハル氏]

アチャポ acapo「おじさん」はエカシより若い人を言う。アチャポと言えば60過ぎた人のことを言う。エカシは70過ぎの人のことを言う。50位だったら若いアチャポと言うだろう。

自分のじいさんのイタッパラカエカシ itakparakaekasi と喧嘩したおじさんは60位だったと思う。そのおじさんはきかない人であった。まず自分の言うことを聞け、というような人だった。シャモの言葉や法律を知っている人ははばをきかせて町内の頭になることが多かった。(千歳編6-3参照)

50歳位の女はメノコ menoko と言う。昔は女は辛口のひとつもきけず、本当に哀れなものであった。

[北野ハル氏]

オンネマツ onnemat は女の年寄り、オンネクル onnekurは男の年寄り。

[北野ハル氏]

#### 6-1-2. 技能と性格による分類

ラメトク コロ クル rametokkorkur は「度胸のある人」ということ。クマにかかっていくような人のこと。

[北野ハル氏]

イヌエ inuye は彫刻すること。イヌエ エアシカイ inuye easkay「彫物がうまい」。

[北野ハル氏]

オッチネ クル otcine kur は、「人前で物を言えないような人」。

アシカイ メノコ askay menoko は、「針仕事のうまい女」。

アシカイ クル askay kur は、「彫物がうまい人」のことではないか。

[北野ハル氏]

エトコトウシマク etokotusmak は、「(先回りしてしゃべること) でしゃべること」。

[石田ナカ氏]

ウェンシサム wen sisam 心の悪い和人

[北野ハル氏]

8つか9つのころ、叔父の家に守っ子(子守)に出された。叔父は、川で漁をするとき、良く舟に乗せてくれた。叔父が言うには、「お前は、シノカッケマツ sino katkemat (本当の淑女)で、カシ イソウシ フミ メノコ kasi isous humi menoko (漁に恵まれた女)だ。ポン カッケマツ チポソッタ ア ワ アン pon katkemat ciposot ta a wa an(お嬢さんが舟尻に座っている)すれば、カシイソウシ kasi isous (漁に恵まれる)するから、イソウン isoun (えびすがきく)するから、舟の縁をつかんで川さ落ちないように」とのことだが、今考えれば、私を舟に乗せたのは、舟が安定したからだと思う。しかし、大きくなっても私がイェトウヌシ ietunus (ともとりする、舟の尻に乗る)だけで魚が寄った。人によっては、魚が寄らない事もある。(千歳編5-1-2参照)

[北野ハル氏]

魚を取りに行っても、気が荒い人が船頭すると魚が逃げる。

[白沢ナベ氏]

正月のお祭り(カムイノミ kamuynomi とだけ言っていた)は、出来る人は毎年やるが、できない人もいるものだ、と私の父は言っていた。

祭りもできない人のことを、シンリッ ノミ カ コヤイランペウテク ウェンクル sinrit nomi ka koyayranpewtek wenkur (先祖を祭ることもわからない貧乏人)と名付けられる、と父は言っていた。イナウチパ カ コル カ コヤイランペウテク、シンリッ ノミ カ コヤイランペウテク ウェンクル inawcipa ka kor ka koyayranpewtek, sinrit nomi ka koyayranpewtek wenkur(祭壇を持つこともわからない、先祖を祭ることもわからない貧乏人)とも言う。イナウチパ アシ カ コヤイランペウテク inawcipa asi ka koyayranpewtek(祭壇を立てることもわからない)とも言う。(千歳編7-12-1参照) シンリッ イチャルパ カ コヤイランペウテク sinrit icarpa ka koyayranpewtek (先祖供養もわからない)などとも言う。(千歳編6-5-6参照)

ウェンクル wenkur の反対は、ニシパ nispa と言う。ニシパはなんでもできる人のこと。ウェンクル wenkur はトランネ toranne (なまける)して、ネブキ nepki (働く)しないから、家族を養うこともできない。ウェンクルは自分の炉に祈るくらいはするかもしれないが、マタギにもいけないような弱い人だから、人を呼んでお祭りなどできない。

[白沢ナベ氏]

イソンクル isonkur は、クマでもシカでも魚でもどんどんそばに寄って来るみたいな人のことを言う。

[白沢ナベ氏]

イソンニシパ *isonnispa* (金持ち) という言葉もある。イソンクル *isonkur* とニシパ *nispa* は両方とも金持ちのことだ。

[白沢ナベ氏]

オンネフチ ウェンフチ *onne húci wen húci* (年寄りババ、貧乏ババ) は悪口だ。

[白沢ナベ氏]

### 6-1-3. 身分・家系による分類

明治44年8月21日ランコシに生れる。北野ハル氏の妹。親の代からランコシに住んでいる。3歳のとき母を亡くし、祖母に育てられたが、祖母も母の後、まもなくして亡くなる。祖父は、早くに亡くなっていて、いなかった。父はあかし(灯り)でアキアジをとる達者な人で、84歳で亡くなった。マルシン、シンボ、フジャなどの和人の親方に可愛がられ、馬の世話などしていた。

[石田ナカ氏]

明治39年6月28日ランコシに生れる。石田ナカ氏の姉。8つ、9つから子守に出されて後、馬くろう、農家、山子のシサム *sisam* 「和人」のところに奉公に行った。

[北野ハル氏]

明治38年、蘭越(ランコウシ *rankowsi*)で生れる。小田喜与作氏の姉である。父も蘭越生れだと思う。母はオサツで生れた。母は28歳でなくなり、その後祖母に育てられた。祖母は、同じ家に住んでいた。父や母のアイヌ名は覚えていない。私にはアイヌの名(レーヘ *réhe*)はない。

11か12歳から、ネシコシに2年子守にいき、さらに奉公に行き、蘭越を離れた。その間育ててくれた祖母が亡くなった。19歳で山仕事をしていた恵庭の人と結婚し、恵庭に5年住んだ。その後、弟の喜与作氏に土地を譲られて蘭越に住むようになった。

家には、シントコがたくさんあったが、これらの宝物は父と父の兄弟が分けて相続した。

[山川キク氏]

私は生まれたのは明治38年6月だが、戸籍は明治39年3月15日になっている。

[白沢ナベ氏]

イソンクル サニケ *isonkur sanike* は、なんでもとれる人の「まき」(子供)という意味だ。ウェンクル サニ *wenkur sani* はすごい悪口だ。「この貧乏野郎」という意味だ。

[白沢ナベ氏]

サニ *sani* も、サニケ *sanike* も意味は同じ。サンリリ *sanrir* という言葉はしらない。サピキリ *sápiikir* という言葉もある。子供のことをサピキリという。私の子供なら、ナベ サピキリ *nabe sapikiri* と言う。息子やら娘やらのこと。

[白沢ナベ氏]

シンナ チセ カラ *sinna cise kar* (別に家を作る)は親の家を離れて独立すること。親が

いい人なら子供に家も作ってやるが、そうでなければ子供が自分で作らねばならない。親がだめだと子供も何もできないからたいへんだ。

[白沢ナベ氏]

クマでもシカでも歩くのはここだと親が教えるのでその子供もいいシカやクマがとれる。魚とりにいってもいい魚ばかりとる。余ると干していぶせば何年も持つ。

[白沢ナベ氏]

#### 6-1-4. 親族名称

クミッポホ ku=mitpoho は、「私の孫」ということ。

[北野ハル氏]

クマツネポ ku=matnepo は私の娘、クポホ ku=poho は私の息子ということ。

[北野ハル氏]

マツカルク matkarku は姪のこと。カルク karku は甥のことだとおもうがわからない。

[北野ハル氏]

イリワク irwak ~ イリワキヒ irwakihi 兄弟。

おにいさんはクユポ ku=yupo という。おねえさんはクサポ ku=sapo、弟はクアキ ku=aki という。妹はクマタキ ku=mataki とか言う。トゥレシ turesi も妹の意味。マタキとトゥレシは似た意味だ。

[北野ハル氏]

いとこはウサタイリワク usatairwak という。男にも女にも言う。

[北野ハル氏]

いとこ同士でウコロ（結婚する）すると、変った子ができるなどということがあった。兄弟の子が結婚したり、姉妹の子が結婚するとよくない。（千歳編6-5-1参照）

[石田ナカ氏]

アアンテ ホク a=ante hoku は、昔のほんとの言葉で旦那のこと。

[北野ハル氏]

「父」をハポ hápo という。

[石田ナカ氏]

「母」をトット totto という。

[北野ハル氏]

おじさんはアチャポ acapo という。おばさんはウナルペ unarpe という。「おまえのおばさん」は、エウナルペ e=unarpe というのかもしれないが、わからない。エコル ウナルペ e=kor unarpe という方がいいかもしれない。エウナルペは少し痛い目の言い方になると思う。エコル アチャポ e=kor acapo は「おまえのおじさん」ということ。

[北野ハル氏]

祖母 フチ húci。マツタフチ mattahuci、マツタエカシ mattaekasi という言葉はあ

るがどれくらい前の人をいうのかわからない。後ろのおばあさん、後ろのおじいさん、という  
ような意味だと思う。

[北野ハル氏]

### 6-3. 人名

私の母はウレンマタン *urenmatan* という名だった。ウレ *ure* は足のことだが、全体の  
意味はよくわからない。歩き方がすなおで可愛いから付けたと聞いたことがある。

[北野ハル氏]

私の父の和人名はカンタチといったが、アイヌ名 (アイヌレーヘ *aynu réhe*) は、ウキリカ  
*ukirka* といった。カンタチというのは、麴 (カムタチ *kamtaci*) にたとえ、長く考える  
性格であったので付けた。

[石田ナカ氏]

私たちの祖母の名前は、ミナレ *mínare* といった。人によっては、ミナリ *minari* と呼  
ぶ人もいた。

[北野ハル氏]

祖父と若いおじさんが喧嘩した。すると、若い方が、じいさんのことを呼び捨てにして、「な  
に、この、イタクパラカ *itakparka*、ぶんなぐるぞ」と言っていたのを聞いた。あんな年寄り  
にこんなこと言う、と、子供心にびっくりしたので、いまだに忘れない。家に帰って母親に言  
うと、エエカシヒ レヘ アオサトウイエ ハウエ ネ ワ *e=ekasihi rehe a=osatuye hawe  
ne wa* 「おまえのじいさんの名を呼び捨てにしたのだ」と言っていた。その時初めておじいさん  
の名前がわかった。普段、エカシの名を口にするようなことはなかった。喧嘩になったからわ  
かった。イタクパラカエカシ、と、エカシ (おじいさん) という言葉を付けて言えばオサトゥ  
イエ *osatuye* (呼び捨て) したことにならないとおもう。(千歳編 6-1-1 参照)

[北野ハル氏]

### 6-4. 身体のお世話

#### 6-4-3. 病気と治療

私の兄は、バチェラーさんの所で、薪を切ったりしていた。従兄が病気で倒れたので、札幌  
まで連れてついていった。アイヌ イノンノイタク ネノ ハウエアン コロ イノンノイタ  
ク *aynu inonno itak neno hawe=an kor inonno itak* (アイヌが祈るみたいに言って祈る)  
するエカシ *ekasi* (じいさん) だと誉めていた。

[白沢ナベ氏]

バチェラーさんは病人がいるとイナウ *inaw* こさえて (作って) 夜も昼もタンクル アナ  
ク ク ポホ ネ ナ シクヌレ ワ エンコレヤン *tankur anak ku=poho ne na.siknure*

wa en=kore yan てイノンノイタク inonnoitak してなおしてくれたんだと。子どもの時に聞きました。

[白沢ナベ氏]

#### 6-4-4. 風呂

水浴びしているのは見たことがない。カワエビ取りやキナ kina (ガマ) 取りに行つて川に入ることはあったが。

[小田イト氏]

#### 6-4-5. お守り・まじない

カシキク kasikik とは、タクサ takusa でお払いのため、体をたたくこと。自分達の父親がやっていたのを見た。

死人の出た家の人をはらうのはササのタクサ takusa ではない。ヨモギか、ソコニ sokoni (ニワトコ) の枝ではらう。(千歳編6-5-6参照)

人の呪いとか、悪い、強い思いを被ったとか、そういうことで悩んでいる人をカシキク kasikik する時に使うイナウ(?)があった。そのイナウはチュクペニ cukupeni (エンジュ) で作った。ソコニと混ぜて使つてお払いをする。

[石田ナカ、北野ハル氏]

#### 6-4-6. 禁忌

口笛はマウシロ mawsiro と言う。夜は口笛を吹いてはいけなかった。女は口笛を吹かない。口笛で合図するということは聞いたことがない。男が歩きながら何か物思いしながら吹くものだと思う。

[石田ナカ氏]

神窓(ロルンプヤラ rorunpuyar) は、「お日様の出る方向」にある。その外にイナウチパ inaw cipa (祭壇) がある。この窓は、拝む(ノミ nómi) 神が出入りするところだから、女は近寄らない。ふだんは閉めてあり、何か心配事があつてカムイノミ kamuy nomi をするとき、家の主人(チセコロクル cise kor kur) が開けるものだ。カムイノミが終わったら、チセコロクル自身が窓を閉める。神窓の附近を汚したら、イテキ ネノ イキパ ヤン! iteki néno ikipa yan! 「そんなことするな」(子供達に向つて。子供が一人なら、イテキ ネノ イキ! iteki néno iki!という) といつて叱られた。

[山川キク氏]

シカの肉については法度はなかったようだが、クマの肉だけには法度があつた。よくよくコタンコロクル kotan kor kur (村長) が根性のいい人なら、山のクマの神様は見てその村長によくしてくれる。クマから肉もらつて食べているから人間の側からも立派な行いをやってみせる。シカはいっぱいいるからあまり大事にしない。(千歳編4-3-1参照)

法度を破るとクマの神は肉を運んで来てくれなくなる。だから、そういうときはイナウをこ

しらえてわけを言って、間違っただことしてごめんなさい、とお酒もあげる。すごきびしいらしい。(千歳編7-2参照)

法度にあたるアイヌ語は忘れたが、法度を犯すと女でも男でもトイコキクク *toykokikkik* (ぶんなぐる)される。女だと、このパウチコロペ、ウエンホイヨブ *pawcikorpe,wen hoyyop* と言って叩かれる。

[白沢ナベ氏]

#### 6-4-9. 守神

女には、一人一人、守り神(メノコカシカムイ *menoko kási kamuy*)が付いていて、女の体に付いているという。だから、「あていな」(ていねいな)女は、酒の残り(パケシ *pákes*)をもらったら、飲む前に、自分の衿首に酒を付ける。これは、自分の守り神に「威勢をつける」(元気付ける)ためだ。男にも守り神がいるのだろうが、男はそういうことをしない。カムイノミ *kamuynomi* をして、直接神に物を言えるからだ。(千歳編6-5-8参照)

[北野ハル氏]

### 6-5. 人の一生

#### 6-5-1. 恋愛と結婚

「結婚」というアイヌ語は忘れたが、ウオシクコテ *uosikkote* というのは、「好きで一緒になる」という意味だ。千歳のアイヌは、「すきづれ」(好きで一緒になった夫婦)が多かった。また、ウコロ *ukor* という言葉もあった。いとこ同士でウコロ(結婚する)すると、変った子ができるなどということがあった。兄弟の子が結婚したり、姉妹の子が結婚するとよくない。

金持の男は、いいなづけに飾り金(シトキ *sitoki*)の付いたタマサイ *tamasay* を贈った。女から男に何かを贈るといのは、聞いたことがない。

[石田ナカ氏]

炉の上座(ロット *rotta*、エロンネ *eronne*)に、世話役と新郎新婦が膳(オッチケ *otcike*、鉢 *patci* パッチ)を挟み、向いあって(ウペカノ *upekano*)座る。世話役は右座(エシソ *esiso*)の方に、新郎新婦は左座の方に座る。まず、世話役がタカイサラ *takaysara* (高杯)、トゥキ *tuki* (杯)、パスイ *pasuy* (箸)を手に持ち火の神(アペフチカムイ *apehuci kamuy*)に二人が結婚するという話を話す。世話役は、カムイノミ *kamuynomi* のために、誰それ

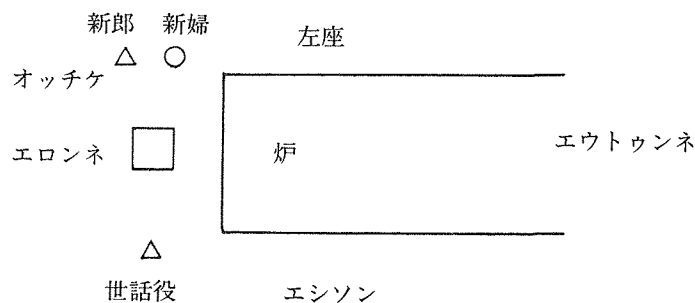


図1. 結婚式の座(新郎新婦の両親などの座は不明)

はエキムネ ekimne の神 (狩の神 [?])、誰それはペトルン petorun の神 (川の神) に  
というように、臨席している人たちに祈る神を指定する。次に世話役は、新郎にトゥキを渡す。  
新郎は、トゥキの酒を飲み、それを新婦に渡し、新婦は残った酒を飲む。最後に残った酒はパッ  
チにあけておく。世話役はもう一度トゥキに酒を入れ、新郎新婦の両親に渡す (この順は、不  
確かで、新郎新婦は後回しだったかもしれない)。

カムイノミが終わったあと、新郎新婦の両親は、残った酒 (火の神に祈った世話役のパケシ  
pákes 「酒の残り」) を「仏」(先祖) に捧げる。炉の下手 (アペケシ apeke) の炉縁木 (イヌ  
ンペ inunpe) のそばの灰の上 (アペケシウトウル apekes utur) に酒をふり注ぐ (サケチ  
ッカ sake cikka)。これで先祖が酒を受け取ったことになる。ふり注ぐ箇所に燠 (おき) を持つ  
てくることはない。ふり注いだあとに残りの酒を飲む。

これらのことが終わったあと、お客らに酒がふるまわれる。酒をふるまわれた男は、妻にパケ  
シをやるが、心ある妻たちは、それぞれの先祖に酒をふり注ぐ (サケチッカ sake cikka) す  
る。

[石田ナカ氏]

(結婚式で女性が先祖に酒を捧げるさい、どうして炉の下手に酒を注ぐのかとの問いに) 仏  
(先祖) は、下がったところにいるから、それにたとえているからだ。(千歳編 6-5-8 参照)

家の外の幣棚 (ヌサ nusa) の端 (ケセケ keseke) にも、サケチッカ sake cikka 「酒を  
ふり注ぐ」するところがある (イナウチパ inaw cipa の北東隅)。ヌサのない家では、イナウ  
チパの北東隅の軒下のきれいなところにした。クマ送りの翌朝は、ここでイチャルパ icarpa  
(先祖供養) をする。

[北野ハル氏]

また、「あていな」(ていねいな) 女は、自分の衿首に酒を付ける。これは、自分の守り神 (メ  
ノコシカムイ menoko kási kamuy) に「威勢をつける」(元気付ける) ためだ。(千歳編 6-  
4-9 参照)

[北野ハル氏]

私達夫婦が結婚式を挙げたときは、世話役の任は、私の父が果たした (サケコロ sake kor  
した)。夫の両親の代理として、夫の伯母が先祖に酒を捧げた。

[石田ナカ氏]

## 6-5-2. 出産

トアン メノコ ホニヒ ポロ ノィネ アン ナ toan menoko honihi poro noyne an  
na (あの女、妊娠しているようだ)。

生まれるのが近い場合はだめだけど、そうでなければ出歩いてもよかった。クマ送りも見に  
歩いた。

[北野ハル氏]

イクルル ikururu は、「産気付く」ことだ。ヌワブ nuwap は、ハイー、ハイー (痛い、



痛い) とうなること。ヤイラッ ノィネ イペ フミ カ ウェン yayrat noyne ipe humi ka wen (つわりらしく、食べるのもつらそうだ)。つわりなどで「吐く」ことはアトゥ atu という。

[北野ハル氏]

イランマカカ アン ポン マッカチ ヤィコサンケ iranmakaka an pon matkaci yaykosanke(きれいな女の子を産んだ)。イランマカカ ポン ヘカチ ヤィコサンケ iranmakaka pon hekaci yaykosanke (立派な男の子を産んだ)。

[北野ハル氏]

赤ちゃんが産まれると産湯で洗ってくるむ。産婆は年寄りで上手な人を頼む。手のきれいな、手の柔らかいようなおばあちゃんがしないとだめだ、と言われていた。そうでないと赤ちゃんがけがをしたり、女のすそ(産道)を痛めることあるからだ。産婆さんへのお礼はお金でなく、首飾りのいいものを手首に縛ってあげた。

[北野ハル氏]

お産が重い時、じいさんがフチカムィ húcikamuy (火の神) に祈ることもあった。金(かね)の火箸(アペ パスイ ape pasuy)を持って、じいさんが炉端に座って、カムィオロイタク kamuy oro itak (神への祈り) と言ってやる。

カムィノミ kamuynomi(神を祭る)の時は一般に炉の灰をならして火箸を立ててする。トゥキ tuki (杯) を持たなければいけないからだ。火箸を持って祈る人もいたようだ。人によっていろいろなやり方があったようだ。

[北野ハル氏]

### 6-5-3. 育児と教育

プンカラシンタ punkarsinta は、ぶどうのつるを曲げて作った、子供を寝かせるもののこと。

[白沢ナベ氏]

私が6歳のころ、母が患ってベッドのような寝床に寝ていた。部屋の中で踊ったりしていたら、トアン ヘマンタ、クィサム チキ マカナク イオロツ クニブ エネ チルィ パテク キ シリ アン! toan, hemanta, ku=isam ciki makanak iorot kuni p ene ciruy patek ki sir an! 「あれ、何だ、私が死んだら、なんとかして人に混じって生きていかなければならないものが、あんな悪さばかりする」と言ってしかった(文末は、チルィ シリ アニ! ciruy sir ani! チルィ シリ アニ アン! ciruy sir ani an! チルィ シリ アン ペ! ciruy sir an pe! ともいう。イオロツ iorot というのは、「仲間に入る」「人の中をくぐる」ということだ)。母はそのまま治らず亡くなった。

[北野ハル氏]

私が何かで愚図っていると、祖母が椀(イタンキ itank)を逆さにして床の上で回転させた。椀がパタンと音をたてて伏して止ると、ウムマ ハウ ウムマ シク ハブ ハブ umma haw

umma sik hap hap と唱えながら、顔をこしらえ、目を大きく開き、目玉をクリクリ回した。姉や兄も、私がぐずると「ウムマハウ言うど」と言って私をおどした。ウムマ ハウ umma haw というのは「馬の声」、ウムマ シク umma sik というのは「馬の目」のことで、納屋につながれた馬の様子を言っている。(ハブ hap というのは「怒る」ということか。[北野ハル氏])

[石田ナカ氏]

#### 6-5-4. 命名

昔は、赤ん坊が産まれてすぐに名前をつけないものだ。子供のそぶりを見て名前をつけたものらしい。一年もたってから付けることもあった。

[北野ハル氏]

#### 6-5-6. 葬礼と先祖供養

ある人がクマに襲われて逃げようとして木に上ったが、クマに引き落とされ殺されてしまった。クマにやられて死んだ人の義理のお婆で、口の達者な(私の父の後妻)タキさんという名の人があった。その女の方は、木のまわりを周りながら、木と地面の神に談判して歩いたそうだ。アイヌイタク aynu itak で、「どうして息子を助けてくれなかったのか」、キム ソ カ タ アン カムイ ネウン インカラ ワ オカ ワ エネ kim so ka ta an kamuy néun inkar wa oka wa ene「山にいる木の神よ、どこを見ていて、このようなことになったのか」とか何とか言って、その木のまわりを三回まわって、リムセ コロ rimse kor (ホイホイと掛け声を出しながら踊る)して、ペウタンケ コロ pewtanke kor (高い声をあげる)したあと、死体のそばにいて、みんな泣いているところに行って泣いたんだってということだ。

その人は女ながらすばらしいパウエトク pawetok (雄弁家)だった。そこのじいさんが、「メノコ menoko (女)だから、そういうこと、おぼえているとおもわなかったが、うちの婆あさんでなければこんなこと言えなかったべな、ケライ カツケマツ エネ クス keray katkemat e=ne kusu」って自慢したの聞いたことある。

[石田ナカ氏]

クマに殺されたときなど、皆で列を作り、イケウエホムス ikewchomsu をする(ケウエホムス kewehomsu ともいう)。男が先にフウォ huwo と言うと、女が後につけてウォーイ woy と叫ぶ(高い声で女が叫ぶことをペウタンケ pewtanke という。細い声でやり、遠くまでよく届く。[小田イト氏])。人が死んで家に死体を運びに向かう時など死体持ってきた人々がこのイケウエホムスを言ったりもする。(千歳編9-3-3参照)

[石田ナカ氏]

クマに殺された人の死体を村に下げる時、運び手は家の前で並んでいる人達にペウタンケ コロ pewtanke kor (ペウタンケしながら)、ウムサ umusa (さすりあう)して、さらに死体にカシキク kasikik (おほらい)、運び手もカシキク kasikikして(ukakik お互いにお払いしあう)、初めて死体を家の内に入れたものだ。現場に行かなかった村人もやってきて、ケ

ウエホムス kewehomsu (「たいへんだったね」という意味の声だし)をした。女達は、泣きながら慰めあった。葬式は普通どおりに行かない。ライチシカル rayciskar もあった。ライチシカルは、普通の泣き方と違う泣き方だ。

[石田ナカ氏]

家の角のあたり、ミムタラ mimtar (外庭)と言われる所に、死人の出た家の人は、特別なお払いをする。太さ1寸、腰くらいの高さのソコニ sokoni の棒を逆木に削った、ちょうどチェホロカケブ cehorkakep のような棒(これをイカキクイナウ ikakikinaw という)を門のように2列に立てて、その間を死人の出た家の家族が通る。お払いする人も一緒に通りながら、タクサ takusa でフスサフスサ hussa hussa と言いながら体を叩いてお払いをする。門を出てからもう一度頭から足まで叩いてお払いして終わりとする。このお払いをイカキク ikakik (ウカキク ukakik と)とも)と言う。西側から入って東側から出る。お払いされた人は門を出たら被っているものを地面において家に入る。カシキク kasikik (お払いのために体を叩く)した人は、最後にその被り物をほろって家に入る。

死人の出た家の人をお払いするときササのタクサ takusa ではなく、ヨモギか、ソコニ sokoni (ニワトコ) の枝ではらう。

[石田ナカ、北野ハル氏]

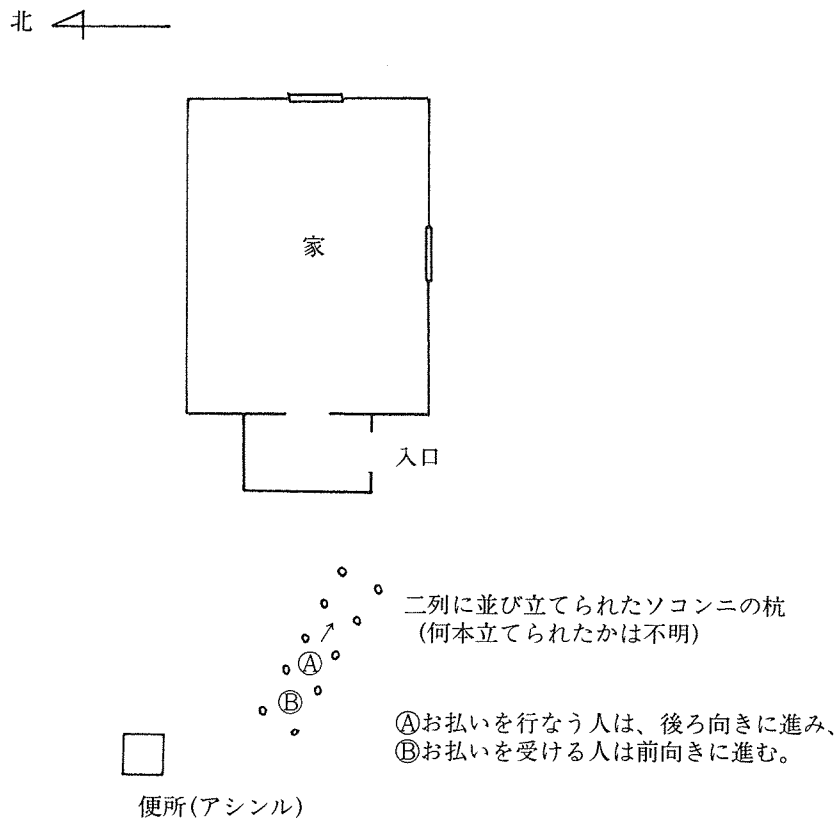


図2. 葬礼におけるお払い

カムイノミ kamuynomi 「拝み」は、女に聞こえるような大きな声でしない。声を大きく、はっきり出して(エサラ esar)言うのは、亡くなった人を送るときで、あの世に行くよう、

はっきりと言う。余計なことを言わなかったということを他の人に示すためにそうする。

[北野ハル、石田ナカ氏]

亡くなった人を埋葬して家に戻ってきたら、ミムタラ *mimtar* で(ミムタラ カタ *mimtar ka ta*) お払い(ウカキク *ukakik*) をする。そのとき、ミムタラ *mimtar* には、4本のイナウが立てられる。ミムタラは、イナウチパ *inawcipa* (祭壇)の南端にある「ごみ捨て場」である。ここに(ミムタラ オッタ *mimtar ot ta*)「仏」(亡くなった人)をあの世に運ぶ神がいる。

[石田ナカ氏]

この神をイルラカムイ *irura kamuy* 「送る神」というと思う。

[小田イト氏]

### 家送り

チセオライテッカ *ciseoraytekka* といって、葬式の時に家を燃やす。女がウォーイ *woy* と言ったら、男はフォ *huo* といって、それを2、3回繰り返す。

火をつけるのはカムイノミ *kamuynomi* をした人だ。ポロ プヤル *poro puyar* (大きな窓)の方から先に燃やすようだった。ガンビの皮に火を付けて放火する。燃え残りの鍋などは墓に持って行って置いて来たようだった。火をつけるのは死人を墓に埋葬した後に行く。葬式が終わった後、何日かおいてから家を建てて燃やしたようだった。作った家に傷をつけたかどうかわからない。家の向きも形も普通の家と変わらなかった。

[北野ハル、石田ナカ氏]

女が死んだら小さい小屋を作ってもらい、それをあの世に持っていく。今生きていれば88、9歳になる姉が44、5歳で亡くなったとき、一間四方の家の作り、2、3人が中に入り、カムイノミを行ない、その後で燃やした。中には、炉も切っており(イヌンペ *inunpe* 「炉縁木」も付いていた)、チタルペ *citarpe* も掛けられ、カケンチャ *kakenca* という竿に姉が着ていた服が掛けられていた。また、小さなシントコ(ポンシントコ *pon sintoko*)もあった。このようにしたのは、姉の遺言があったからで、姉は妾で、先に亡くなった夫とその本妻と一緒にいるから、自分の家が1軒ほしいと前から言っていたからだ。ともに燃やして送る着物や椀(イオルシ *iorus*)は、はさみ、小刀で傷を付けておいた。このように女が亡くなったとき家を送ることをチセオライテッカ *cise oraytekka* という。燃やすとき、女たちは、オーイ、オーイと叫ぶ。

世話役に当る男が「なになにの血統の者であるから、なになにの祖先(フチ *húci*)のもとへ曲りなく行くように」と仏に祈った。これをイヤイタクコテ *iyaytakkote* という。

[北野ハル氏]

### 先祖供養

クマ送りの翌朝、男が先に家の中で火の神(アペフチ *ape huci*)に「先走り」を言ってもらい、そのあと、女だけがパケシ *pákes* を膳にのせ、もう1つの膳に先祖に捧げる御馳走を

のせ、家の外の幣棚(ヌサ nusa)の端(ケセケ keseke)に行き、これらのものを散らして先祖に捧げる。これをイチャルパ icarpa という。御馳走、酒を全部地面にまくということはない。大部分は家の中に持って帰り、皆で食べる。御馳走として捧げるものには、珍しい魚、団子、赤飯などの珍しい食べ物、筋子、サケの切り身などがある。これらは、小皿にのせるが、昔は椀(イオルシペ ioruspe)に入れた。イオルシペ ioruspe は、きれいな塗り物の椀(イタンキ itanki)のことだ。

[北野ハル氏]

イチャルパをするとき、代表の女が次のように祈る。この祈りは、父に教わったものだが、本来は、母親から教わるものだ。祈りの文句で父に教わったのは、これだけだ。

エカシ ウタラ フチ ウタラ、ウヘコタノ オカ ワ、ウコエウエペ クス ネ ナ。  
ekasi utar hūci utar, uhekotano oka wa, ukoeuwepe kusu ne na. 「先祖たちよ、よそを向かないで、分けあって下さい」

ウヘコタノというのは、「よそを向く」ということ、ウコエウエペというのは、分けあうことで、ウコイペ ukoipe 「一緒に食べる」の意味である。「ウコウサライエ ukousaraye してエ ヤン e yan」ともいう。

[北野ハル氏]

シヌラツパ sinnurappa というのは、イチャルパ icarpa と同じ意味だが、千歳のことばでは、人を大勢呼んでするイチャルパ icarpa を特にシヌラツパという。クマ送りの翌朝にする先祖供養は、シヌラツパである。

[北野ハル氏]

シヌラツパ sinnurappa (先祖供養)はカムイノミ kamuynomi (お祭り)の時にやるが、それ以外にもシヌラツパのために人がわざわざ集まってやることもある。ヌサカムイ nusakamuy はヌサカムイ、イチャルパ icarpa するところはイチャルパするところでイナウをこしらえる。そして、女同士で、おまえはどこそこの神、というふうに分担してやる。

[石田ナカ氏]

シヌラツパ sinnurappa (先祖供養)は女だけがやるものではない。前の日、家の裏にチェホロカケツ cehorkakep をたくさん作って立てておく。翌日、男の人が先に神様にものを言って、こういうことでイチャルパ icarpa するからってということ言ったら、女がトゥキ tuki(杯)もってお酒を注いで、それから一人一人分担して立てて置いたチェホロカケツの根本にご飯その他の備えものを捧げる。

[小田イト氏]

オメカブ omekap はカムイノミ kamuynomi (お祭り)した次の日のことを言うのではない。だから、オメカブとシヌラツパ sinnurappa (先祖供養)は関係ない。

男達がチェホロカケツ cehorkakep をヌサ ケセケ nusa keseke にたくさん立てて、供物を捧げる分担を女達に割り当てる。1本ずつのイナウを指定する。割当は、その家の奥さ

んではなく、旦那さんだ。一人の男がその場に残り、これから、シンヌラナパを行う由を言う。女達は、トゥキを手にしてチェホロカケアの頭に酒をかける。その間男達は家の中で酒を飲んだり話したりしている。

[小田イト氏]

厚賀の親戚のシンヌラナパ sinnurappa (先祖供養) によられた時、男がいないのでフチが呼ばれて先祖供養の指図をしていた。おまえはテンキアチャボ、おまえはトックリアチャボに捧げろ、とか。

[小田イト氏]

先祖供養では、昔でも、ひいじいさん、ひいばあさんにまでは供物をあげなかったようだ。せいぜい2代前までのじいさん、ばあさんまでで終わりではないか。自分の覚えている人までやるのではないか。

[小田イト氏]

シンヌラナパ sinnurappa (先祖供養) で妻、夫の血縁で区別して供物を捧げることはない。捧げた供物はフチカムイ húcikamuy (火の神) の家来 (ウスシウ ussiw) がチェホロカケアに魂を入れて死者の国 (ポクナモシリ poknamosir) へそれを持って行く。

[小田イト氏]

火の神の「お使い (家来)」は、炉の右座よりの下 (しも) にいる。アペサムンカムイ ape sam un kamuy とかアペサムンフチ ape sam un huci と呼ばれる女の神だ。

[石田ナカ氏]

女は、男からパケシ pákes をもらったらこのウシシウに酒を降り注ぐ (チクカ cikka)。

[小田イト氏]

葬式やシンヌラナパの時にチカルカルペ cikarkarpe (刺繍の入った着物) を着たのは見たことがない。

[小田イト氏、石田ナカ氏]

#### 6-5-7. 死生観

あの世には、部落があって、人の魂があので世に行けば、その部落で暮らす。

[北野ハル氏]

身内がなくなったら、家で葬式をした。亡くなった人が男なら父親の元へ、女ならば母親の元へ行くものとされていた。送るときに、「振り返らずに行くんだよ」(アラパ クス ネ ナ、ホサリ サクノ arpa kusu ne na, hosari sakno) と祈った。私の子供の時分は、焼き場で焼いたが、その前は焼かずに埋葬した。

[山川キク氏]

シンヌラナパ sinnurappa (先祖供養) で捧げた供物はフチカムイ húcikamuy (火の神) の家来が死者の国 (ポクナモシリ poknamosir) へ持って行く。

[小田イト氏]

### 6-5-8. 女性とカムイノミ

男のすること（特に神に関係すること）を見たり聞いたりする女は、ホィヨメノコ hoyyo menoko といわれ、叱られた。火の神（アペフチ ape huci）は、女の神だが、私はアペフチの話を知ることがない。女（メノコ menoko）に神のことを教えるのは、「法度（はつと）するもの」だった。

[山川キク氏]

私の父は、神のことは、「むずかしい」（ホカムパ hokampa）から、女には立ち入らせなかった。カムイノミのおり、私が聞き耳を立てて祈りを聞いていても、他のことをやっていると叱った。女が神に関することをやると、パウチコロペ pawcikorpe 「悪い精神がある者」と叱られる。だから、カムイノミは大きな声で（エタラカ etarka）しない。女に祈りの言葉を覚えられたら、女にホィヨイタク hoyyoitak されるからだ。ホィヨイタクというのは、「神様にどやされるようなことを言う」という意味だ。そのようなことをする女をホィヨメノコ hoyyo menoko ともいう。そんなことがあると、エマウコウエン emawkowen する（運が悪くなる）。家庭によっては、女であっても（メノコ エネ ヤクカ menoko e=ne yakka）人のやることは何でも覚えろと、カムイノミの言葉を教えることがある。

[北野ハル氏]

カムイノミ kamuy nómi をしているとき、女は声を出さずに黙っていなければならない（オリパク oripak していなければならない）。もし何か言ったら、「しゃべるな」（イテキネノ ハウエオカ ヤン！ iteki néno haweoka yan!）と叱られる。

[山川キク氏]

「あていな」（ていねいな）女は、酒の残り（パケシ pákes）をもらったら、飲む前に、自分の衿首に酒を付ける。これは、自分の守り神に「威勢をつける」（元気付ける）ためだ。男にも守り神がいるのだろうが、男はそういうことをしない。カムイノミ kamuynomi をして、直接神に物を言えるからだ。（千歳編6-4-9参照）

[北野ハル氏]

イチャルパ icarpa（先祖供養）をするときの祈りの文句は、本来は、母親から教わるものだが、私は父親から習った。祈りの文句で父に教わったのは、これだけだ。（千歳編6-5-6参照）

[北野ハル氏]

火の神の「お使い」（ウスシウ ussiw）は、炉の右座寄りの下（しも）にいて、アペサムンカムイ ape sam un kamuy とかアペサムンフチ ape sam un huci と呼ばれる女神だ。女が男からパケシ pákes（火の神への祈りの時の酒の残り）をもらって酒をふり注ぐのはこの神だ。（千歳編6-5-1参照）

[石田ナカ氏、小田イト氏]

## 6-6. 人間の動作・仕草

### 訪問・挨拶

客が人の家を訪問するさい、戸口でエフエエエ éhúééé というものだ。子供の頃、家に入るとき、年寄りをからかうため、和人風に「こんにちは」と言って入ると、年寄り「何でそんな、『こんにちは』って言う」と叱った。

[山川キク氏]

低い声でハーブ hap と言って指を鼻の下につけ、左から右へ動かすのは、ごちそうになったときなどにする女の動作で、男はしない。色々世話になったという意味です。私のおかさんは、久しぶりに会った髭の長い年寄りの人に挨拶されて、オンカミ onkami (拜む) された時にもそうやったのを見た。歩いている途中だったが、被り物を取って座った。すると相手の人は、おまえが子どももなくしたという話を聞いても会いに来れなかった。この通り歳行っただけだから来れなかった、という意味の挨拶をしていた。

若者が何年もエンヌカル カ ソモキノ アン アイネ エンヌカル en=nukar ka somokino an ayne en=nukar (私に会わないでいて会う) すれば、私はタサ tasa (お返しに) ハーブ セコロ hap sekor (ハブと言って) 挨拶する。

[白沢ナベ氏]

タサ カニ カ ケトゥ クカラ ア ワ tasa kani ka k=etu ku=kar a wa 「お返しに私もあいさつしたよ。」

[白沢ナベ氏]

女同士の挨拶は座って抱き合ってさすり合って、顔をくっつけてやる。お母さんとお母さんぐらいの年の人がやっていた。ヘンパクパ カ ウヌカラ アン カ ソモキ henpakpa ka unukar=an ka somoki (何年も会わなかった) と言って、ヘンパク パ カ エチヌカル カ ソモキ。エシリキラブ ハウエ クヌ コロカ ケク カ エアイカブ。コンネ プ ネ クス クケマ パセ ワ。henpak pa ka eci=nukar ka somoki. csirkirap hawe ku=nu korka k=ek ka eaykap.k=onne p ne kusu ku=kema pase wa 「何年も会わなかった。不幸の話を聞いても来れなかった。年取って足重くて。」と、泣きながらやる。その後、手を交差して握りあって泣いていた。こういう女の挨拶をウムサ umusa と言う。

[白沢ナベ氏]

### 座り方

女性の「ねまりかた」(座りかた)をモノア mónoa といい、男性のあぐらをウキロセレ ukirosere という。

[山川キク氏]

コクカサパ カシ タ ア kokkasapa kasi ta a (正座する)。

[白沢ナベ氏]



ウエソフキ uesopki は、カムイノミさい、祈り言葉が言える男たちが、向い合って2列に並んで座ることである。カムイノミを主宰する人(火の神[フチカムイ húci kamuy]に祈る[ノミ nómi]人)は、北側の列の一番下座(炉のそば)に座り、この向いに、家の神(チセコロカムイ cise kor kamuy)に祈る人が座る。この人の右には、酒を鉢(パッチ patci)から汲み、エトウヌフ etunup に入れる人、サケコロクル sake kor kur が座る。サケコロクルの後には、ウエソフキしている男達にエトウヌフから酒を注ぐ(イオマレ iomare)女が控えている。女は、一番最初に主催者にイオマレする。主催者は、男たちにどの神に祈るかを指定する。戸口の神(アパサムンカムイ apa sam un kamuy に対して祈ることを指名された者は、他の男達の祈りが終わった一番最後に次のように言って祈る。「ピリカカムイ エク pirka kamuy ek して アナク エアパチャカ anak e=apacaka、ウエンペ エク wenpe ek して アナク エアパコキク クス エアン ルウェ ネ ナ anak e=apakokik kusu e=an ruwe ne na」これは、「いい神が来たら戸をあけ、悪いのが来たらたたけ」という意味だ。カムイノミが终れば、男たちは、妻を呼びよせパケシ pákes をやる。酒は、一旦もらえば、もらった人のものだ。飲み切れずに残った酒(イエメトウ iemetu)は、瓶などに入れてとっておく。

[石田ナカ氏]

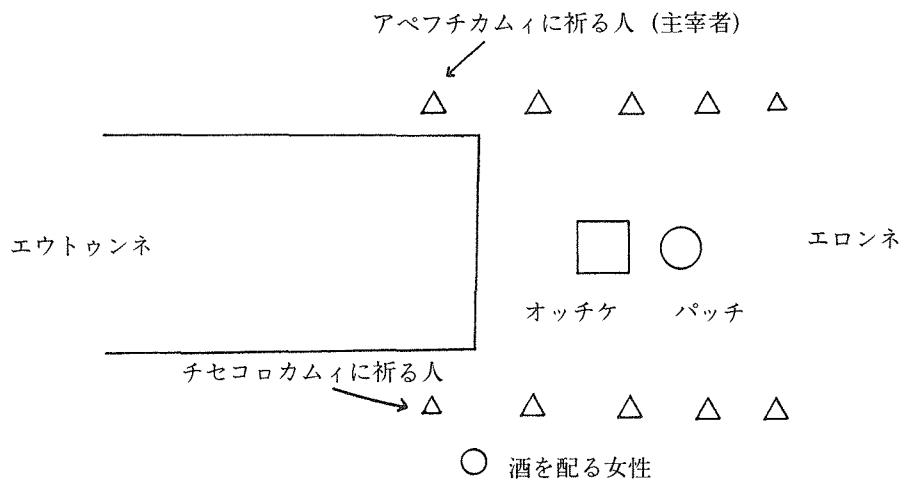


図3. カムイノミの座 (ウエソフキ)

### お礼

自分の家の人クマをとって来て、そのうちの奥さんがクマの肉をもらうときもハープ hap と言ってオリパク oripak (慎む)して食べないとまたクマさんが入ってこないから、と言ってやっていたのを見た。

[白沢ナベ氏]

### 食事の作法

クマの胸の肉ヌマツ numat は大事な部分なので、ハープと感謝して食べないといけない。

[白沢ナベ氏]

クマの鎖骨は大事な部分だから、旦那のお椀によそう。

[白沢ナベ氏]

箸の持ち方は和人と同じだ。

[白沢ナベ氏]

2つ3つ位の子供はすぐくこぼす。そういう時、シネ アマム ヌム カ ア エ ソモキ  
コル チシ ペ ネ ナ (一粒でも食べないと粒が泣くものだ)、そういう食い方するもの  
でない、という。魂あるから芽出すのだから、とうるさかった。

[白沢ナベ氏]

クマの肉はカリンカリンと音出して口大きく開けて食べるものではないと言われる。食べ方  
の荒い子供はアルウェンクル イペ エキ シリ ネ ワ arwenkur ipe e=ki siri ne wa(本  
当の貧乏人の食べ方をおまえはしているよ)と叱られる。音を立てて食べるのもよくない。ウェ  
ンカムイ wenkamuy (悪い神)は腹がへっているから、そう言う時は喜んで向って来る。そ  
うなると大変だ。イテキ フミヒ アシテノ イペ ヤン iteki humihi asteno ipe yan (音  
を立てないで食べなさい)と言われる。

[白沢ナベ氏]

オリパクノ イペ アン ペ ネ ナ oripakno ipe=an pe ne na (落ち着いて食べるもの  
だ)と言われる。イテキ アシケペツ アニ ニマクトウル ア カル ペ ネ ナ iteki askepet  
ani nimakutur a=kar pe ne na (指で歯の間をほじるな)とも言われる。汁飲むのに音立てて  
も怒られる。ヘマンタ イペ エキ フミ アン hemanta ipe e=ki humi an (なんていう食  
べ方だ)と怒られる。

[白沢ナベ氏]

### 左利き

左利きに対しては、うるさく直さなかったのが、昔でもよくいた。ハリキ テク エィワン  
ケ harki tek eywanke (左手を使う)。

[白沢ナベ氏]

### 視線

首をかしげるはオクケウエ カイエ okkewekaye とも言うし、レウエ rewe とも言う。  
肩痛い時など、どのくらい痛いか様子をみる時にする。これはなんだろう、と不思議に思う時  
はよくよく見る。そのことをピリカノ ヌカラ pirkano nukar (よく見ろ)と言う。人の言っ  
ていること嘘だと思って首をかしげることはないようだ。お父さんやったのを見たことない。  
ネブ カ ピリカノ ア ヌカル ペ ネ ナ nep ka pirkano a=nukar pe ne na 「何かよ  
く見るものだ」と言われた。

[白沢ナベ氏]

シクトモモ siktomomo という言葉は知らない。

シクトココ siktokoko は「目玉をひっくり返して白目を出して見る」ことだ。なにかいた  
ずらでやるようなことらしかった。道で知合いに会った時、物をいうかわりにいたずらでやっ

て笑って通り過ぎるようなものだった。

シカニ ウェンネ アンペ ヌカラ sik ani wenne an pe nukar と言えば「悪く見る」という意味になる。口に出して言えないからにらむということだ。トアंकル ウェンネアンペ ウェン エンヌカル キ キ カネ ヘマンタ エンコルシカ プ ネ プ ネ toankur wenneanpe wen en=nukar ki ki kane hemanta en=koruska p ne p ne 「あの人私をにらんで、何を怒っているのだろう。」と言う。シク アニ ウェンネアンペ クヌカルヌカル アクス シケラナアッテ sik ani wenneanpe ku=nukarnukar akusu, sikeranaatte「目で悪い奴をじっと見たら目を伏せてしまった。」

[白沢ナベ氏]

#### 怒った時の仕草

イルシカ ワ パプシ トウリリ iruska wa papus turiri (怒って口をとがらす)。タアंकル ク コイルシカ クス ク コ PAPUSHITOURIRI ワ エウン クイタク カ ソモキノカン taankur ku=koiruska kusu ku=kopapusturiri wa eun ku=itak ka somokino k=an(この人に腹を立てて口をとがらす)。ペネ クス シヌマ カ エネコタ シネ イタク カ イェーカ ソモキ pe ne kusu sinuma ka en=ekota sine itak ka ye ka somoki (なもんだから、自分も私に一言もいわない)。

[白沢ナベ氏]

#### 威張る時の仕草

ノッタララ nottarara(あごを上げる)、エネノッタララ en=enottarara(わたしにいはる)。

[白沢ナベ氏]

### 6-8. 交易・通婚・戦争

クマの皮は内地に持って行った。皮買いが来ていた。

[小田イト氏]

シントコ sintoko (行器)、トゥキ tuki (杯)、パッチ patci (鉢)などはアイヌのものとはいいながら、皮と交換に内地から持って来たものだ。アイヌが作ったものではない。

[小田イト氏]